

生成文法から見た三上章

竹 沢 幸 一

0. はじめに

本稿では、三上章（1903-1971）の日本語文法研究を生成文法の立場から再検討する¹。三上没の翌年発行された『現代語法序説』の復刻版に対する書評（1972）において、山日光は「三上の考え方はチョムスキー旋風以降よほど分かりやすくなってきた」とその先駆性を指摘し、さらに「三上は後年生成文法に大きな興味と期待を寄せたが、それは自説に通ずるものをそこに見たからであった」とも付け加えている。以下では、三上文法の先駆性・現代性を念頭におきながら、生成文法の観点から彼が目指したものを再解釈、再評価してみたい。

1. 三上文法の特徴

三上文法の全体像については、寺村秀夫が『続・現代語法序説』復刻版に対する「解題」（1972）のなかで簡潔でわかりやすい解説を行っている。

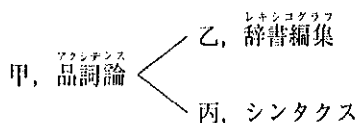
…ミカミさんの文法研究は「ハ」と「ガ」の表すものは何か、「主語」とはいったい何か、という問題意識からスタートしたのであったが、これはとりもなおさず日本語の根底にかかわる問題だった。ミカミさんはそれを徹底して日本語のシクタクティックな構造全体をときほぐす中で明らかにしようとしたのである。同時に、日本語の特質を、たえずヨーロッパ語、ひいては言語一般の普遍性との対置において捉えようとした。この一貫した二つの基本方針こそミカミ文法の本領であり、それが現在も内外の言語学者にとって貴重な指針であり続けるゆえんであろう。（pp. 237-8）

ここでは、この引用における寺村の指摘の中から抽出した次の3点に焦点をあて、それらをひとつずつ追いながら三上文法の特徴について考察する。

- A. シンタクスを基礎におく日本語文法研究
- B. 主語問題を核とした日本語構造の追及
- C. ヨーロッパ語との対比に基づく日本語の特徴づけ

2. シンタクスに基礎をおく日本語文法研究

三上文法の特徴を考える際にまず着目すべきは、彼がシンタクスを核にした文法研究の必要性を明確に宣言している点である。それは『現代語法序説』の「シンタクスの試み」という副題に象徴されているわけだが、三上は其中で、下に示したように、広義の文法を、品詞論、辞書編集、シンタクスの3つの領域に分割し、さらに文法の中で大切なのはシンタクスであると明言している。



(『現代語法序説』復刻版 p. 5)

現在の言語学の状況において、とくに生成文法的な言語観を多少とも受け入れて研究を行っているものにとっては、シンタクスを中核におく文法観は当然の前提となっている。しかしながら、クロノジカルな観点から三上文法をそれ以前の伝統的な国文法と対置して考えたとき、このシンタクス中心主義はきわめて重要なポイントである。伝統的な文法研究は、ほとんどの場合、品詞論とシンタクスが原理的には区別されていたとしても実質的には未分化であり、その多くが品詞ごとの縦割りで論じられていたり、形態的あるいは観念的な基準に基づく品詞分類を前提としており、それによって窮屈に手足を縛られた文法だった。そうした背景を鑑みると、1950年代前半に三上がシンタクスを中心に捉えた日本語文法の構築を唱えたことは革新的だったといえる。

これと関連して、三上は、品詞論に対して、辞書編集とシンタクスの準備をする段階に過ぎないと述べ、次のような位置づけを与えている。

[…] 品詞分けの目標は、辞書編纂の間に合うように、またシンタクスの記述に好都合であるように、ということになる。この実際的な目標を見失わないようにしなくてはならない。これは何も品詞分けは間に合わせのもので結構だという意味ではない。やはり筋の通った分類でない、辞書にとって有難くないし、シンタクスの記述にも差し支えるのである。つまり方法は理論的でなければならないが、それは実際的な目標に到達するための理論的方法であるべきで、そこの本末をテントウして分類のための分類に陥ったりすることのないようにしたいというのである。

(『現代語法序説』復刻版 p. 6)

この三上の主張は、生成文法とアメリカ構造主義言語学(American structural linguistics)との関係に重ね合わせて考えてみると、かなり興味深い。

アメリカ構造主義言語学では、一連の発見手順(discovery procedure)によって分節化(segmentation)され、分類(classification)される要素の集合が文法と考えられていた。また、厳密なレベルの分離というものを行い、音素論(phonemics) ⇨ 形態論(morphemics) ⇨ シンタクス(syntax) ⇨ 談話(discourse)のように、より小さい単位の分析が大きい単位の分析に先行することが求められていた。とくに文法に関係する形態論とシンタクスの部分に話を限ってみると、語形態の分析がまずなされ、シンタクスはそれに後続するという形になり、シンタクスの側から形態論の問題を考えることは「レベルの混合」(mixing levels)として厳しく禁じられていた。こうした分析手順の方向性は、アメリカ構造主義において最も厳密な形で明示的に条件化されており、結局のところ、そのシンタクス研究はきわめて表面的な分析にとどまり、文法に対する貢献はほとんどと言っていいほどなされなかった。

こうしたアメリカ構造主義の方法論に対して、チョムスキーは、文法は一定の手順に基づいて得られる単なる要素のタクソノミーではないとして、それを徹底的に批判した。そして、シンタクスを言語研究の核に捉えることによって、語形態の研究とシンタクス研究の関係を逆転させ、単語の内的特性の分析もできる限りシンタクスの原理に従わせるようにした。また単語の品詞分類に関しても、生成文法では統語分析に先立って一定の品詞分類ありきというような考えは採用されていない。

さてここで三上文法に話を戻すと、彼もまたシンタクスの研究にプライオリティを与え、その原則に基づいて品詞論や動詞の活用などの形態論の分析を積

極的に行っている¹。そして、興味深いことは、上の引用に明記されているように、「分類のための分類」、つまりタクソノミー的研究に陥ることも強く戒めている。これは、品詞論に代表されるタクソノミー的研究の傾向がきわめて強く、シンタクスの領域に不十分な形でしか切り込めないでいたそれまでの伝統的日本語文法研究に対する厳しい警句であり、まさに生成文法の方向性と合致する三上の先見性の一つだと言える²。

以上、シンタクスを文法研究の中心に明確に捉えたという点で、三上文法は現代的な意味合いをもっていることを述べてきたが、そうした意味で日本語に関するシンタクス構築の試みとしては、先駆的なものであったと言ってもいいであろう。これはむしろ、主語問題を核とした日本語文法の追及という2番目の特徴からしても、彼の研究の必然的な方向性と考えられるが、主語問題に移る前に、彼のシンタクス研究の特徴について少し述べておきたい。

三上のシンタクス研究における重要な特徴として、次の3点を挙げるができるだろう。

- a. 「実用的」な文法の構築
- b. 思弁的・観念的な概念・議論の排除
- c. 形式の重視

まず三上は、それまでの原理論を重視した国文法に対するアンチテーゼとして、「実用的」な文法に非常にこだわっている。三上は原理論的な議論が現実の具体的データの分析に対して有効性が乏しいことに不満を感じ、現実のデータに対応できる「実用的文法」を求めた。「実用性」の強調が純粹に学問的な文法研究の出発点として妥当かどうかという根本的な問題は別として、三上の実用的文法とは単に言語教育などに対して有効であるということ以上に「実証的」文法とも換言できるようなものだと考えられる。すなわち三上は、それまでの国文法には思弁的、観念的な概念や議論が多く含まれており、それによって具体的な事実分析する際の実証性が阻害されていたことから、実証性を高めるためにデータを豊富に用いて抽象的な議論を可能な限り排除すると同時に、シンタクティックな形式を重視することによって日本語の構造分析を行おうとしたのである。実用性を実証性と解釈してみれば、そこから導かれる b. 思弁的・観念的な概念・議論の排除や c. 形式の重視といった特徴ともども、経験科学としての生成文法と親和性をもつものであった。したがって彼の研究は、それ

までの国文法とは異なり、初期の日本語生成文法の中でも言及され、また彼自身も晩年、生成文法に興味を抱くようになったと考えられる。

3. 主語問題を核とした日本語構造の追及

次にBの「主語問題を核とした日本語構造の追及」に話を進めるが、三上の主語論については多くの先行研究が存在するのであまり深入りせず、ここでは次のCの問題への橋渡しとして、三上文法全体の中の主語問題の位置づけについて簡単に考えてみたい。

あらためて言うまでもなく、三上は、日本語文法の全体像がヨーロッパ語文法から輸入された主語という概念によって著しく歪められてしまったと考え、日本語の分析から主語という概念を取り除く必要があることを、生涯主張し続けた。それは比較統語論の観点から言い換えれば、日本語とヨーロッパ語の根本的な対立機軸が「主語のあるなし」という点にあると認定し、それを彼の研究の出発点として宣言したことに他ならない。そして、日本語の根本的特徴が「主語がない」ということならば、その特徴が日本語の様々な文法的側面とどのような関係をもっているかを徹底的に検証しようとしたのである。つまり三上は、日本語とヨーロッパ語を「主語のあるなし」という点で対置させ、日本語全体のシンタクティックな姿をまさにこの対立機軸の上で描き出そうとしたのであった。

三上文法が世に出たとき、その体系性に疑念をはさむ声があがったという⁶⁾。前述の実用的文法ということとも関係するが、三上は実際の事実分析に重きをおき、原理論には言及しなかった学者なので、そのような批判が出たのも無理からぬところがある。そこに三上文法の物足りなさを感じる言語学者や国語学者が、筆者自身も含めて、多数いるものと推測される⁷⁾。しかし上で述べたように、「主語がない」ことに結びつけて日本語文法を分析するという三上の研究方法は、終始一貫している。つまり三上文法の体系性とは、主語問題を中心に日本語の様々な現象（主語、格、活用、品詞論、動詞分類、敬語、文型、など）の間の関連性を探る方法論的一貫性にあるといえる。三上が示した分析結果の体系性より、いま風に言えば彼の「リサーチ・プログラム」の一貫性にこそ、三上文法の真髓があると考えられる。

4. ヨーロッパ語との対照と普遍性

最後に三上文法の3つ目の特徴として、Cの「ヨーロッパ語との対比に基づく日本語の特徴づけと普遍性」について考えてみよう。前節で三上文法全体における主語問題の位置づけを述べたが、あらためて三上の出発点である「主語否定論」を考えてみると、これは言うまでもなく否定的言明である。「日本語には主語はない」、「日本語のどこを観察しても、主語というものは出てこない」と述べているのであるから、主語をもつとされる言語の特徴をまず知らなければならぬ。したがって、三上の分析は最初から必然的に対照言語学的、比較統語論的にならざるをえないことになる。

このように、主語問題とヨーロッパ語との比較・対照に基づく日本語の特徴づけは、三上文法の中では切断不可能な関係になっている。以下では、三上文法に見られる日本語文法に対する対照言語学的な観点ないし比較統語論的な手法について、現在の生成文法のアプローチと比較しながら考えていくことにする。

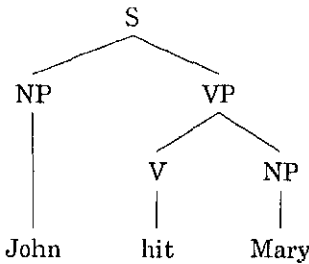
生成文法は、言うまでもなく、その誕生から人間言語の普遍性を追及してきた。他方、現実問題として、言語間には統語のレベルでも歴然たる個性、つまり差異が存在するわけで、初期の生成文法はこの言語間における個性と普遍性という相反する特徴をどう理論的に捉えるかという問題に対しては1をつくんでいた。しかし1980年前後に「原理とパラメータのアプローチ」(Principles and Parameters Approach)と呼ばれる研究プログラム(Chomsky 1981など)が提案されるに至り、初めて普遍性と個性の問題に体系的かつ理論的にアプローチできる体制が整った。

原理とパラメータの基本的な考え方を簡単に紹介するなら、一定の範囲内で変異を許すパラメータ装置を組み込んだ普遍的な原理の相互作用によって言語間の共通性と個性を体系的に捉えることを目指す研究プログラムといえる。これは、生成文法の歴史の中でもきわめて重要な転換点と考えられている提案であり、このアプローチのとくに重要な特徴は、言語間の様々な表面的違いを、原理の中に組み込まれたごく少数の根本的なパラメータを設定することによって原理間の相互作用から関連づけて説明するという点にある。

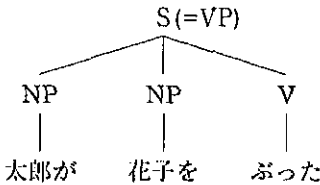
たとえば、初期のそうした提案の重要なものの一つにHale (1983)の「階層性パラメータ」(Configurationality Parameter)がある。これは句構造の構成原理である「Xバー理論」(X' theory)に関わるパラメータであり、分か

りやすく言えば、構造上の階層関係を利用して文法関係を表示するタイプと、構造が平板 (flat) で文法関係を表示するのに階層性は利用しないタイプの2種類の言語を区別するパラメータがXバー理論の中に組み込まれているという主張である。そして、英語は主語と目的語が構造上、非対称的な位置に生成されるより階層的な節構造をもっている「階層型言語」(configurational language) であるのに対して、日本語はそれらに構造上、同等の資格が与えられる平板構造をもった非階層型言語 (nonconfigurational language) として区別される²⁾。伝統的な句構造を使えば、英語と日本語の文の基本構造はそれぞれ下の(1)(2)に示すように表される。

(1)



(2)



さらに、日本語のような非階層型言語に見られる下に挙げたような表面的な特徴はこの階層性に関する根本的なパラメトリックな違いと関係づけて説明されると、Hale に分析する。

非階層型言語の諸特徴

- a. 「自由」語順 (“free” word order)
- b. 非連続的表現の使用 (use of discontinuous expressions)
- c. 自由または頻繁な「代名詞落とし」(free of frequent “pronoun drop”)
- d. 名詞句移動の欠如 (lack of NP movement transformation)

- e. 虚辞の欠如 (lack of pleonastic NPs (*there, it, il, etc*))
- f. 豊かな格体系の使用 (use of a rich Case system)
- g. 複合動詞または動詞活用体系の使用
(use of complex verb words or verb-cum-AUX system)

Hale の階層性パラメータに関する詳しい説明は省略するが、この Hale の提案を三上の主張とつき合わせてみると、興味深いことに、両者の間に類似性を見て取ることができる。三上は、日本語の主格名詞句は対格名詞句や与格名詞句などと同様、「補語」としての資格をもっており、英語の主語のように構造上、特別扱いをする必要がないことを主張したが、他方、Hale の提案はまさにこれを階層的統語構造の観点から明示的に捉えようとしたものである。すなわち、上の(1,2)に図示したように、主語名詞句が VP 領域から外に出ていて、目的語などそれ以外の名詞句との間に構造的非対称性を示す（主語が目的語などを非対称的に構成素統御する）英語と、主語とそれ以外の名詞句が対称性を示す（主語と目的語が相互に構成素統御しあう）日本語が2つの言語タイプとして区別されているのである¹⁰。さらに、Hale が階層性パラメータとの関係で挙げた非階層型言語の特徴の中には、たとえば、格体系の豊かさ、虚辞の欠如、複合動詞や動詞活用の特徴など、三上が日本語で主語問題との関連の中で積極的に論じていた現象が含まれていることにも注目すべきである。三上はそうした点について Hale のような厳密な議論を行っているわけではないが、基本的な発想を共有していると捉えてよいであろう。

また最近の生成文法における同様のパラメトリックな観点からの日英語比較としては、Kuroda (1988) の「一致パラメータ」(Agreement Parameter) の研究、Fukui (1988) の「機能範疇パラメータ」(Functional Parameter) の研究などがある。黒田成幸は日英語の根本的な違いを「一致」のあるなしに求め、また福井直樹はそれを限定辞 D (eterminer)、補文化辞 C (omplementizer)、時制辞 T (ense) といった「機能範疇」(functional category) のあるなしに求めて、両言語の違いを体系的に捉えようとした。そして、どちらの分析でも、日本語の主格名詞句は英語のそれと違って VP 内部にとどまっており、統語上、英語の主語のような特別な統語的資格をもたないという考え方が示されている。もちろん、三上と比較すれば、彼らの研究のほうが「より深いレベル」での説明を追及していることは確かであるが、主語の特徴づけに関しては、基本的に三上の考え方と一致する。

以上、三上の考え方が最近の生成文法の原理とパラメータのアプローチに見られる比較統語論研究で示された分析と基本的に同じ発想をもつことを見た。ただこうした類似点も関わらず、三上の日本語と他言語との比較・対照について、筆者は彼の著作を初めて読んだときに少なからぬ違和感を感じた。その違和感とは、三上があまりにも日本語とヨーロッパ語との違いを強調し過ぎているのではないかというものであった。生成文法では普遍文法の追求という大きな目標を常に意識するので、三上のように「日本語はこんなに違うのだ」といった論調には反発さえ感じた。

基本的には同類の議論を提示しながら、筆者が三上を最初に読んだ際に感じた違和感はやはり、生成文法が目指してきたような普遍文法への収束が三上の時代には存在しなかったためであると考えられる。つまり、三上の思考も日本語とヨーロッパ語の対立をいわば「主語のあるなし」というパラメータに関連させて説明しようとした試みと解釈できるのだが、三上の時代には、残念ながら、言語間の共通点と相違点を体系的に取り込めるだけの普遍文法理論が存在しておらず、結果的に日本語の「主語抹殺論」といった形で個別性を際立たせる方向に向かうことになってしまったと考えられる。

最後に私見を一つ付け加えるならば、筆者は Hale, Kuroda, Fukui とは異なり、日本語を(1)の英語同様、主格 NP は VP の外側の S の領域内、厳密に言うとき制辞 T の領域内にあることを示し、さらにそれによって日本語の格体系がかなりきれいに説明できることを主張してきた¹⁾。その点では三上とは真向から対立する立場をとっていることになる。三上が50年前に提起した日本語の主語の位置づけに関する問題は、現在の生成文法でも研究者の間で意見の分かれる大きな課題の一つとなっており、彼が提示した問題の重要性を物語っている。

5. おわりに

本稿では、三上の日本語研究について生成文法の観点からの再解釈、再評価を行い、その先駆性、現代性を考察した。三上文法を紹介する際、西洋崇拜思想に挑戦した「土着主義」に基づく日本語研究という、ある意味、センセーショナルなキャッチフレーズで飾られることがしばしば行われている。しかし彼の時代を越えた重要性を考えるためには、むしろその背後に潜んでいる方法的側面にさらに注目する必要があることを最後に強調しておきたい。

参照文献

・三上章の著作

- . (1953)『現代語法序説 — シンタクスの試み —』刀江書院 (復刻版 (1972) くろしお出版)
- . (1955)『現代語法説法』刀江書院 (復刻版 (1972) くろしお出版)
- . (1968)『主語事務取扱い』『ことばの宇宙』(再録:『三上章論文集』(1975) pp. 343-346. くろしお出版)

・三上以外の文献

- Chomsky, Noam. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- . (1970) "Remarks on nominalization" In *Readings in English Transformational Grammar*. R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds.) 184-221. Ginn and Co.
- . (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Fukui, Naoki. (1986) A Theory of Category Projection and Its Applications, Ph. D. dissertation, MIT.
- Hale, Kenneth. (1983) "Warlpiri and the grammar of nonconfigurational languages," *Natural Language and Linguistic Theory* 1: 5-49.
- 金水敏 (1997) 「国文法」『岩波講座言語の科学 5 文法』119-157.
- Kuroda, Shige-yuki (1988) "Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese" *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.
- 益岡隆志 (2003) 『三上文法から寺村文法へ — 日本語記述文法の世界』くろしお出版.
- Takezawa, Koichi. (1987) *A Configurational Approach to Case-marking in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington.
- 竹沢幸一 (1998) 「第 I 部: 格の役割と構造」『日英語比較選書 9 格と語順と統語構造』竹沢幸一・John Whitman, 研究社出版
- Ura, Hiroyuki. (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*. Oxford University Press.
- 山口 光 (1972) 「書評: 三上章『現代語法序説』」『言語』vol. 1, no. 6. 449-454.

注

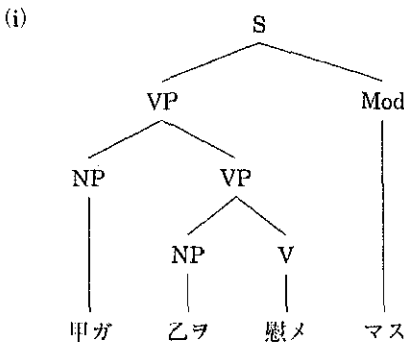
¹ 本稿は、2003年3月30日に誕生100年を記念して行われた「三上章フェスタ」(於: 東京フォーラム)の「フォーラム: 三上文法への誘い」において「言語研究から見た三上章」というタイトルで口頭発表した内容をまとめたものである。フォーラムコーディネーターとして、三上文法について発表する機会を与えてくださった神戸市外国語大学の益岡隆志氏に感謝する。なお、「三上章フェスタ」については、フォーラムのハンドアウトも含めて、次のホームページで内容を知ることができる。

<http://homepage3.nifty.com/kurosio/mikami/mikami.html>

² 先駆性・現代性は、上記フォーラムにおいて益岡隆志氏が三上文法の第1のキーワードとして挙げたものである。益岡(2003)を参照。

³ とくにChomsky(1965, 1970)などを参照。

- ¹ 三上は別のところ(『現代語法新説』復刻版 pp. 72-3)で次のようにも述べている。
品詞分類のための品詞分類(としか思えないようなもの)ではいけない。だいたい品詞分類にあまり浮身をやつすことそのことが、日本文法を発育不良に止めていると言えないこともない。かりに、学会の口頭発表や専門誌の論文を、向こう十年間品詞論お断りというようなことにでもしたら、多くの研究者の努力が正しく軌道に乗って、眼ざましいことになるに違いない。
- ² 上記フォーラムでは、野田尚史氏が三上の主語論についての詳しい発表を行った。
- ³ 山口(1972)を参照。
- ⁴ 逆に、そうした問題に立ち入らなかったことが、日本語教育関係をはじめとする記述重視の研究者(金水1997の言葉を借りれば、「新記述派」日本語研究者)に受け入れられた原因でもある。
- ⁵ 人間言語の普遍性を前提とした合理論(rationalism)に基づく生成文法研究では、言語間の相違を前提とした古典的類型論とは異なり、人間言語の中核的統語部門において言語間になぜ違いが存在するかという点がむしろ説明すべき問いとして浮上することになる。原理とパラメータのアプローチ以前の生成文法研究では、實際上、記述の妥当性の追及に比重がおかれていたため、こうした問いが提起されることはなかった。
- ⁶ 厳密に述べると、Haleは統率・特縛理論(Government and Binding Theory)の枠組みで、語彙項目の下位範疇化(subcategorization)特性を余すところなくマッピングすることを要求する「投射原理」(projection principle)と語彙構造(LS:lexical structure)・句構造(PS:phrase structure)という2つの構造表示の区別を用いて、投射原理がLS, PSとも当てはまるのが階層型言語、LSにのみ当てはまるのが非階層型言語というパラメータ設定を提案している。
- ¹⁰ 三上は日本語の主語に英語のような特別な伝統的資格は与えないものの、普通(存在文などを除いて)、主格名詞句はそれ以外の格の名詞句より優位な位置を占めているとして、「主語事務取扱い」(1968)などでは、主格名詞句をVP内に生起させながらも、対格名詞句より構造的に高い位置に置く下のような構造を提案している。



- ¹¹ Takezawa (1987), 竹沢 (1998)などを参照。筆者と同じ立場の研究としては Ura (2000)なども参照